



栃木県那須塩原市

ICT 活用や英語教育を軸にした 小中一貫教育で21世紀型人材を育む

2005年に誕生して以来、「人づくり教育」を掲げている栃木県那須塩原市では、全ての公立学校で、小中一貫教育の実施と授業改革を進めている。小・中の教員が一緒に行う授業研究会、電子黒板やタブレット端末などのICTを活用した授業の充実、外国語指導助手（ALT）の全校常駐配置などによって、子どもたちに多様な教育機会を設け、生涯にわたる「学びの伸びしろ」と21世紀型能力を育もうとしている。

栃木県那須塩原市

◎ 2005年、黒磯市・西那須野町・塩原町が合併して現在の形となる。栃木県北部に位置し、塩原温泉郷や板室温泉などの名湯や、塩原溪谷や沼ッ原湿原などの観光名所をもつ。酪農も盛んで、生乳の粗生産額は本州1位（全国4位）を誇る。面積/約592.74 km² 人口/約11.7万人 市立小学校/22校 市立中学校/10校 児童生徒数/9,938人
教育委員会 所在地 〒329-2792 栃木県那須塩原市あたご町2-3
 電話 0287-37-5349
 URL <http://www.city.nasushiobara.lg.jp/28/87/>

教育長インタビュー

21世紀型人材を育むために まず教員の授業観の転換を図る

那須塩原市教育委員会 教育長 **大宮司敏夫**

全市挙げての小中一貫教育 で「学びの伸びしろ」を育む

那須塩原市では、市の誕生以来一貫して「人づくり教育」を施策の柱に掲げてきました。市の教育委員会が担当する義務教育課程での使命は、子どもたちに生涯における「学びの伸びしろ」、言い換えると、学びの土台となる確かな学力・体力、社会力、豊かな心を、バランスよく、しっかり育むことだと捉えています。

そのためには、小中9年間を通し

た学びの連続性を確保することが重要だと考え、市の誕生当初から小中連携の在り方を模索してきました。そして、2012年度からは中学校区ごとに小中一貫教育の研究を進め、2014年度には塩原小中学校が施設一体型、黒磯北中学校区が施設分離型の小中一貫教育を本格的に開始しました。他の中学校区でも、2016年度から全校で本格的な小中一貫教育を行う予定です。

本市の小中一貫教育の特徴は、9年間を「4-3-2制」の指導区分に分



だいがうじ・としお 新潟大教育学部卒業。1977年の大田原市立親園小学校を皮切りに、小学校で9年間、中学校で10年間教壇に立つ。その後、指導主事、管理主事を経て、那須塩原市立西小学校校長、那須塩原市教育委員会学校教育課長、栃木県教育委員会事務局那須教育事務所長などを歴任し、2012年から現職。

け、発達の段階に応じた指導を系統的行っている点にあります(図1)。この区分の利点は、5・6年生で一部教科担任制を取り入れるなど、「中1ギャップ」や「10歳の壁」に対応しやすくなることが挙げられます。

小学1年生から行う英語教育では、市独自に9年間一貫のカリキュラムを作成し、英語によるコミュニケーション能力の育成を図っています。また、小・中教員の相互理解を図るため、中学校区ごとに互いに授業を見せ合い、授業改善に取り組む合同授業研究会を年数回実施しています。

「学び創造プロジェクト」で教員の「授業観」を転換する

「人づくり教育」の理念はこれからも変わりませんが、一方で、グローバル化や情報化が急速に進み、変化が激しい社会を生きていく力を育むことも重要です。習得した知識・技能を基に自ら課題を見だし、主体的・協働的に解決していく力—いわゆる21世紀型能力を育むためには、他者とのかかわりの中で思考力・判断力・表現力を育成する学習活動を、積極的に行う必要があります。そのためには、「何を教えるか」を中心とした従来の教員の授業観を、「どのように学ばせるか」という授業観に転換することが不可欠です。

そこで、2015年度に開始したのが、「なすしおばら学び創造プロジェクト」です。各校内でチームを組み、市教委の担当指導主事との協働体制で単元構想と指導案を練り、研究授業を実施して授業改善に生かしていきます。そのPDCAサイクルを回すことで、チーム全体としての授業力を高め、「知り・考え・行動する」子どもを育成しようとしています。

市教委は4年間掛けて全校を回り、各校のプロジェクトを支援していき

図1 人づくり教育推進のための主要事業

学年(注1)	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	1年生(7年生)	2年生(8年生)	3年生(9年生)
段階	Ⅰ期				Ⅱ期			Ⅲ期	
発達の特徴	具体物を通して考える時期				論理的思考に興味をもつ時期			論理的思考の定着時期	
指導の重点	基礎・基本の習熟を図る 繰り返し指導や補充指導など				論理的・抽象的に考える 指導に徐々に移行			基礎・基本を応用して 論理的に考える指導	
教育委員会としての 主な事業	<ul style="list-style-type: none"> ●学力・体力の向上…学び創造プロジェクトの実施、ICT利活用の推進、標準学力検査、授業力向上委員会、ALT常駐配置による英語教育の推進、コミュニケーション力の向上、教科体育・部活動の充実など ●「社会力」の向上…いじめ・不登校の未然防止、積極的な児童生徒指導、学習指導のためのhyper-QU(注2)の活用推進、学級活動の改善充実、体験活動を重視したキャリア教育の実践 ●豊かな心(感性)の育成…道徳教育・人権教育の改善充実、共生・多文化社会における国際理解教育の推進、ちびっこふるさと探検隊、北海道洋上学習、中学生海外派遣事業など 								

(注1) ()内は施設一体型の学年。 *那須塩原市教育委員会提供資料を基に編集部で作成
(注2) 学級集団の状態や学校生活への満足度を子どもへのアンケートによって測定するアセスメント。

ます。その際、同じ中学校区の教員も加わり、授業改善の意識やノウハウが広がることもねらっています。例えば、今年度研究授業を行った市内の三島小学校では、同じ中学校区の小・中の教員が指導案づくりを協働で行ったところ、小・中共に学習内容の系統性を意識し、見通しをもった授業が出来るようになりました。

これらの授業改善においては、以前から導入を進めているICT機器も大いに活用しています。2013年度から電子黒板、書画カメラを整備し、タブレット端末は、2016年度以降、小学5年生～中学3年生が1人1台持てるように整備する計画です。

また、各教科の指導力のある教員を「授業力向上委員」に指名し、教職歴10年未満の若手教員に師範授業を行う取り組みも始めました。

このようにして教員の授業観を転換し、指導力を伸ばしつつ、2020年度以降に次期学習指導要領が全面实施され、新たな指導方法が一層求められる時を、万全の態勢で迎えられるようにしたいと考えています。

「意味のある活動」にこだわり続ける

現在、さまざまな取り組みを行っ

ていますが、取り組みを形だけに終わらせないことにも注力しています。

例えば、海外交流の一環で、毎年オーストリア・リンツ市に中学2年生を派遣しています。かつて私が同行した際、リンツ市の子どもたちが自国の文化や歴史を堂々と話すのに対し、本市の中学生にその発想がないことに危機感を覚えました。

英語を通してコミュニケーションする力、地域のことを知り、発信する力を育みたいと考え、事前研修の内容を大幅に見直すと共に、後にALTを全小・中学校に常駐させることにもつながりました。ALT常駐化により、子どもは日常的に英語に触れることが出来、ALTを授業だけでなく、学校外も含めて、より有効に活用できるようになりました。

ICT活用においても、各校にICT支援員を置き、活発な活用を促そうとしています。ICT支援員も機器の操作だけでなく、ICTを活用した教育にも詳しい人を配置し、教員とタッグを組んでICTを活用した授業づくりを行ってもらう予定です。

このような「意味のある活動」によって、市全体の教育力を高め、21世紀をたくましく生き抜く子どもたちを育てていきたいと考えています。

教育委員会の取り組み

1人1台のタブレット導入やALT常駐配置など 21世紀型人材の育成に向けて積極的に投資

小学5年生以上に1人1台の タブレット端末を整備

那須塩原市では、「人づくり教育」の一環として、子どもに21世紀型能力を育むことを目指し、豊かな学びを実現するためのICT機器の活用や、コミュニケーション能力を育成するための小中一貫の英語教育を積極的に推進している。

ICT活用は、分かる授業をより効果的に行って子どもの課題解決能力を高めること、また、校務を効率化して教員が子どもと向き合う時間を確保することなどを目的とし、環境整備を進めてきた。整備は2013年度から本格的にスタート。2015年度から3年間掛けて、全小・中学校の普通教室、特別支援教室、理科室、体育館に、モニター型電子黒板と書画カメラを配備する。タブレット端末は、2016年度以降、小学5年生～中学3年生が1人1台持てるように



那須塩原市教育委員会
参事兼学校教育課長

伴 真貴子

ばん・まきこ

「明るく、元気に。全ては子どもたちのために」



那須塩原市教育委員会
学校教育課学校指導係
副主幹・指導主事

山本 英明

やまもと・ひであき

「地道に粘り強く、子どもの未来につながる授業づくり、環境づくりを目指す」

整備する計画だ。学校教育課の山本英明指導主事は次のように説明する。

「小学4年生までは、具体物やさまざまな体験を通して学ぶべき時期です。そこで、1人1台のタブレット端末は、論理的思考力が育ち始める小学5年生からの導入としました」

更に、タブレット端末は、教員が日常的に使えてこそ授業でも活用できると考え、校長を含む全教員にも配布。ネットワーク環境は、2013年度から各校の校舎耐震補強工事の際に有線LANの敷設工事を進め、無線LANも2016年夏までに全校にアクセスポイントを設置する予定だ。

また、ICT環境の全校整備に先立ち、同市の豊浦小学校を実証研究校に指定。2014年9月にタブレット端末を導入し、ICT活用の研究を進めた。その中で、大きな役割を担ったのがICT支援員だ。同校に1人が常駐し、「このような教材が欲しい」「こういう見せ方をしたい」という教員の希望に応じて、ハード・ソフトの両面で効果的な使い方を一緒に考えた。

「学校教育とICTの双方に精通したICT支援員が常駐することで、学校現場のニーズに合った支援が得られますし、教員にはすぐ助けてもらえるという安心感も生まれました。教員とICT支援員と一緒に授業づくりを進める中で、市教委でも全校展開に向けてノウハウや課題を吸い上げることが出来ました」（山本指導主事）

教員の授業力向上のため、教員向けのネットワーク整備も行う。実証研究

校での研究授業、「なすしおばら学び創造プロジェクト」での研究授業など、優れた授業実践を映像化し、市教委のサーバーに蓄積。教員がサーバーにアクセスし、いつでも好きな場所でその映像を見て、研修できるeラーニング環境を整備する予定だ。

ALTを全校に常駐させ 英語を使える環境を整備

英語教育は、小中一貫教育の中でも特に力を入れている。2009年度、小学5・6年生で年間35時間の外国語活動をスタートさせ、2010年度からは教育課程特例校制度を活用し、小学3・4年生で年間20時間、2014年度には小学1・2年生でも年間10時間の英語活動を必修とした。中学校でも年間10時間をコミュニケーション主体の授業に充てている。

特徴的なのは、ALTの活用だ。以前はALT10人を各中学校に配置し、必要に応じて小学校に派遣していたが、2014年度からは34人に増員し、市内全小・中学校に常駐とした。ALTの多くは「教師としてふさわしい資質・能力を持った人」という人材要件で外部に業務委託し、研修を受けた上で派遣されている。

ALT常駐化により、休み時間や給食など授業外の時間も子どもたちとの交流が可能になった。幼稚園や保育園のクリスマスイベントへの派遣など、学校外での活用も進めている。

小学校には更に、「英語教育推進教師」も5人派遣。基本的に英語の教

図2 英語・外国語活動における学習到達目標

学年・授業時数	Listening/Speaking/Reading/Writing
中学3年生 英語140時間 (うちコミュニケーション主体の授業10時間)	①ALT(外国人)に那須塩原市や日本の暮らし・文化について1分程度のプレゼンテーションをすることができる。(表現・Sp) ②簡単な道案内や乗り換え案内の概要・要点を理解することができる。(理解・L) ③物語や随筆を読んで内容を理解し、理由を添えて感想を述べるができる。(理解・R) ④自分の夢について理由を添えてまとまりのある文章を書くことができる。(表現・W)
中学2年生 英語140時間 (うちコミュニケーション主体の授業10時間)	①ALT(外国人)に、自分の学校生活や夏休みの予定について伝えることができる。(表現・Sp) ②ALT(外国人)にインタビューし、相手の出身地や旅の予定などの概要や要点を理解することができる。(理解・L) ③初歩的な英語で書かれた物語や説明文を読み、その内容を理解することができる。(理解・R) ④外国人の人に那須塩原市を紹介する短い文章を書くことができる。(表現・W)
中学1年生 英語140時間 (うちコミュニケーション主体の授業10時間)	①ALT(外国人)に、住んでいる地域の様子を交えながら、自己紹介をすることができる。(表現・Sp) ②買い物の場面で初歩的な英語による受け答えをすることができる。(理解・L) ③初歩的な英語で書かれた手紙やメール文を読み、その内容を理解することができる。(理解・R) ④自分の好きなものや得意なことについて紹介する短い文章を書くことができる。(表現・W)
小学5・6年生 外国語活動35時間	①相手の気持ちを考えながら、自分の気持ちや考えを伝えることができる。 ②将来の夢について、理由を添えてALTや友だちにわかりやすく伝えることができる。
小学3・4年生 英語活動20時間	①名前や好きなものを伝えながら、自己紹介をすることができる。 ②友だちの良さに気づき、友だちをほめることができる。
小学1・2年生 英語活動10時間	①誰にでも笑顔であいさつをすることができる。 ②誰にでも感謝の気持ちを言葉で伝えることができる。

*那須塩原市教育委員会提供資料を基に編集部で作成

員免許を有し、小学校の外国語活動や市の指導方針にも精通した非常勤講師だ。定期的に小学校を訪れ、担任とALTとの橋渡しや授業づくりを支援し、時にはT3として授業にも入る。

小・中で英語教育を系統的行うため、市独自の9年間一貫カリキュラムも作成中だ。2014年に国立教育政策研究所の渡邊寛治名誉所員を委員長とした「英語教育推進委員会」を設け、市教委で英語施策を担う英語教育推進室と、小・中学校教員、英語教育推進教師を委員として、検討を重ねてきた。2014年度には試案を作成し、2015年度は各校で試行しながら修正を加え、2016年度に本格的な運用を始める予定だ。

「コミュニケーション活動中心のカリキュラムとし、積極的に英語でコミュニケーションを図る態度や能力を育むことを目指しています。正しい文法を意識しすぎるよりも、間違えることを恐れなくて、人とコミュニ

ケーションすることの大切さを知ってほしいと考えています。学習到達目標も作成し(図2)、評価法の確立も目指しています」と、学校教育課の伴真貴子課長は説明する。

客観的な評価指標と教員の負担軽減が課題

授業外でも英語コミュニケーションの機会を多数設けている。「グローバルコミュニケーションデー」は、希望する学校にALT10人前後を終日派遣する取り組みだ(年3回が上限)。日本の遊びや英語でのゲームを一緒に行うなど、活動内容は各校で工夫する。出身国や文化的背景が異なるALTとの交流を通して、グローバル社会の多様性を学ぶのがねらいだ。

夏休みには、市内の小・中・高校生を対象とした「イングリッシュサマースクール」を開催。児童生徒約30人に3～4人のALTが付き、一緒にゲームやスポーツなどを行うも

ので、活動中のALTとの会話は全て英語だ。2015年度は650人以上が参加したため、延べ6日間開催した。

子どもの海外体験も支援する。オーストリアのリンツ市との交流事業は市誕生以来の取り組みだ。毎年、中学生40人程度を同市に派遣。10日間のうち5泊ホームステイをする。

「渡航前には派遣生にALTとのマン・ツー・マンのレッスンを行います。帰国後はどの生徒も見違えるほど成長し、成果を実感しました」(伴課長)

一連の施策の具現化には財政的な裏付けが欠かせない。教育は「未来への投資」と語る市長の支援に加えて、議会などへの働き掛けも大切だと、山本指導主事は語る。

「教育長が自ら何度も学校を訪れ、市議会議員の方々や首長部局にも授業参観の機会を設けているのが大きいと思います。実際、ICTを活用した授業を見ていただくと、その様子に大変驚かれます。子どもの学びの様子を直接確かめることで、本市の教育のねらいや効果を実感していただけていると感じています」

今後の課題は、改革の成果を測る評価方法の開発だ。実証研究校では、8～9割の子どもがICTを活用した授業を「楽しい」「分かりやすい」と感じているというアンケート結果が出ており、英語スピーチコンテストでも好成績を取めるなど、成果が表れつつある。そうした手応えを客観的な指標で明示するため、現在行われている教育施策全体の効果検証を民間企業と共同で行う予定だ。

「教員の負担軽減も課題で、授業観の転換と教員の負担のバランスをどのように取っていくのかが、我々の知恵の出どころでしょう。これからも『人づくり教育』という不易の目標に向けた環境づくりに努めていきたいと考えています」(伴課長)

小学校での実践

ICT 活用を「チーム豊浦」で
推進し、実証研究校として
全市展開の素地を築く

那須塩原市立豊浦小学校

◎ 1972（昭和47）年創立。スローガンは「花いっぱい やさしいいっぱい 夢いっぱい」。「学びづくり」「心づくり」「体づくり」をミッションに、ユニバーサルデザインやICT機器を活用した新たな学びを研究している。

校長 塚田英二先生

児童数 367人

学級数 17学級（うち特別支援学級5）

住所 〒325-0023 栃木県那須塩原市豊浦17

電話 0287-60-1294

URL 正式なホームページを2016年度開設予定

1年目はとにかく活用し、
操作に慣れ、有効場面を探る

那須塩原市立豊浦小学校は、2014年度、文部科学省「ICTを活用した教育の推進に資する実証事業—外国語活動—」、及び2014年度・2015年度、那須塩原市教育委員会「ICTを活用した新たな学びの推進事業」の研究指定を受け、ICTを活用した授業づくりに取り組んでいる。2014年8月に行われた校舎の耐震補強工事の際に、校内のLAN環境を整備し、タブレット端末96台、電子黒板、書画カメラ、デジタル教科書を配備。夏休み明けから5・6年生の授業でそれらを活用した授業を始めた。

「ICTを使えば良い授業が出来るというわけではありません。授業のどの場面でどのように使えば効果的なのか、使いやすい方法は何かを探るために、1年目はとにかく使い、操作に慣れることを目標にしました」

と、人見守之教頭は語る。

2年目の2015年度には、1～4年生用のデジタル教科書も導入し、全年でICTを活用できるようにした。目標に「アクティブ・ラーニングの実践」を掲げ、低学年は一斉指導の場面での電子黒板や書画カメラの活用、中学年はグループ学習でのタブレット端末の活用、高学年は1人1台のタブレット端末の活用と、発達の段階に応じた目標を設定。さまざまな教科でICTを活用し、子どもたちの活発な学習を促している。

例えば、理科の授業では、実験の様子をタブレット端末で撮影し、実験後、グループで発表に使う画像を選んでコメントを書き入れたり、算数の授業では、立体図形の分類にタブレット端末を活用し、自分の考えを説明したり発表したりした。

家庭学習でのタブレット端末の活用も促進。算数や英語で反転学習(*)を意識した内容での持ち帰り学習を

行ったほか、市教委のサーバーに入っているドリル教材「eライブラリー」を、学校でタブレット端末にダウンロードして持ち帰り、家庭で自主学習が出来るようにした。インターネット環境のない家庭の子どもでも、自分の学力に応じた課題で家庭学習に取り組めるようになっていく。

1年目の試行、2年目の全学年展開と段階を踏んだことで、全教員にICTの活用が浸透。1年目に全校で約400時間だった使用時間は、2年目の6・7月の2か月で1000時間を超え、授業に欠かせないものとなった。

有用性を感じさせる研修と
ICT支援員の常駐が鍵

全教員に浸透した要因には、まず研修の工夫が挙げられる。ICT導入前の夏休みに2回、市教委の支援で、全教員を対象に操作方法などの研修を実施した。年度途中からの取り組みであるため、夏休み明けからすぐに使えるようにするための。

導入後は、30分のミニ研修を放課後に随時実施。参加は自由で、書画カメラのセッティング方法（写真）、デジタル教科書の活用法など、すぐに活用できる内容とした。

「多忙な中でも参加しやすいように時間は短くし、何回も開くようにしました。活用シーンをたくさん見せることで、スキルアップだけでなく、ICTを使う意欲を高めることにもつながったと感じています」と、研究主任の和田るみ子先生は話す。

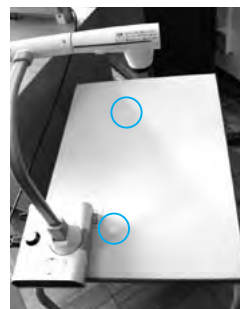


写真 書画カメラの台の上に、ノートを置く位置の印(○)を付けた。ユニバーサルデザインの考え方を基に、誰もが迷うことなく見やすい位置に置けるようにしている。これで時間の無駄も省ける。

* 新たな学習内容を、通常は児童・生徒が自宅で授業の映像を視聴して予習し、教室では講義を行わず、知識確認や問題解決型学習などを行う学習法のことを反転学習（授業）という。

1年目は5・6年生の活用が中心だったが、授業でICTを使う際には全教員に参観を呼び掛けた。全学年への展開に向け、活用場面をイメージしてほしいと考えたからだ。そして2年目には、1年目に6年生担任だった教員2人を低学年と中学年に配置し、その教員が中心となって各学年に適した活用を模索している。

「ミドルリーダーが率先して取り組むことが、ICT活用を全校に広める鍵と考え、各学年に配置しています。その期待に応えて率先して授業公開をしてくれていますし、その学び合いが、ICT活用のみならず、授業力向上につながっていると感じています」と、塚田英二校長は語る。

2つめの要因は、ICT支援員の常駐だ。機器の準備やトラブル対応といった機器使用面の支援はもちろん、教材作成の補助や授業中のタブレット操作の支援など、あらゆる面で教員のICT活用を支えている。

「教員の希望をくみ取って教材づくりをアドバイスしてくれますし、操作が不安な時には授業に入って子どもを支援してくれるので、教員は安心して授業が出来ます」(人見教頭)

市教委の支援も大きい。各教科の

指導主事が何度も同校を訪れて指導案と一緒に作成し、無線LAN環境の不調の際にもすぐに駆け付けて対応してくれるなど、いつでも誰でも使える環境づくりに尽力してもらった。

「ICTの活用で、授業準備や授業が効果的かつ効率よく進められるようになりました。最初は研修などの支援も必要ですが、その教育効果や利便性が分かってくれば、手放せなくなっていきます」(塚田校長)

チェックシートを活用して ICTの活用事例を共有

子どもたちの学習意欲も高まっている。5・6年生へのアンケート結果では、「学習が楽しい」「授業をもっと受けてみたい」の肯定率は95%以上で、「考えを深める」「自分の考えを伝える」の肯定率も90%に上り、能動的に学んでいる様子が見え始める。

「外国語活動で、タブレットを家に持ち帰り、写真を撮ってクイズを作るという課題を出した際、普段自分の考えを発表するのが苦手な子どもが自ら進んで発表する姿を見た時には感動しました。全体でもタブレットを活用した宿題は忘れずに提出するなど、学習意欲が高まっていると

感じています」と、和田先生は語る。

同校では、タブレット活用によりおろそかになりがちな「書く」指導も重視。例えば、タブレット端末に観察記録を残しても、まとめは模造紙に書いて発表したり、朝会スピーチなどの要点を書く「聞くぞうメモ」や、本のあらすじや感想を書きためていく「家読カード」を活用したりと、書く機会を意識的に増やしている。

今後の課題は、授業のねらいに応じてICTが必要な場面とそうでない場面を見極める力を付けることだ。その有効な資料となるのが、ICT導入以降、全教員が記録してきた「ICT活用事例チェックシート」(図3)だ。教材研究の際、これを見れば教科・単元ごとに有効なICT活用法が分かる。

「これからも『チーム豊浦』で学び合いながら共有財産を増やし、ICTをうまく活用しながら、更なる授業改善を図りたいと考えています。それによって、指導の効率化を図り、教員が子どもに向き合う時間を増やしていきます」(塚田校長)



那須塩原市立豊浦小学校 校長
塚田英二
つかだ・えいじ
「笑顔で親切な子」、そして自らを「きたえる子」を育てていきたい」



那須塩原市立豊浦小学校 教頭
人見守之
ひとみ・もりゆき
「『どうして?』『なぜ?』から広がる世界を子どもたちと一緒に解き明かしたい」



那須塩原市立豊浦小学校
和田るみ子
わだ・るみこ
教務主任、研究主任。「児童のもっている良さや力を伸ばす手伝いをしていきたい」

図3 「ICT活用事例チェックシート」

教科	単元	活用場面	活用方法	活用効果	活用時の工夫・留意点・有効だと感じる点
国語	教科書	読書	タブレットで読み取り	読み取りが速く、音声が聞き取りやすい	音声を聞き取りながら読むことで、理解が深まる
算数	教科書	図形	タブレットで図形を動かす	図形を動かして観察できる	図形を動かして観察することで、理解が深まる
英語	教科書	発音	タブレットで発音練習	発音練習が楽しく、繰り返し練習できる	発音練習が楽しく、繰り返し練習することで、発音力が向上する
外国語	教科書	発音	タブレットで発音練習	発音練習が楽しく、繰り返し練習できる	発音練習が楽しく、繰り返し練習することで、発音力が向上する
音楽	教科書	楽譜	タブレットで楽譜を動かす	楽譜を動かして観察できる	楽譜を動かして観察することで、理解が深まる
美術	教科書	図画	タブレットで図画を描く	図画を描くことが楽しく、繰り返し練習できる	図画を描くことが楽しく、繰り返し練習することで、図画力が向上する
体育	教科書	運動	タブレットで運動の様子を撮影する	運動の様子を撮影して確認できる	運動の様子を撮影して確認することで、運動が楽しくなる
保健	教科書	健康	タブレットで健康に関する情報を検索する	健康に関する情報を検索して学ぶことができる	健康に関する情報を検索して学ぶことで、健康意識が高まる
道徳	教科書	道徳	タブレットで道徳に関する動画を視聴する	道徳に関する動画を視聴して学ぶことができる	道徳に関する動画を視聴して学ぶことで、道徳意識が高まる
総合	教科書	総合	タブレットで総合に関する情報を検索する	総合に関する情報を検索して学ぶことができる	総合に関する情報を検索して学ぶことで、総合的な学習能力が高まる

ICTの使用状況などを書き込み、週指導計画のファイルに綴じる。年度末に活用事例として、全教員分をまとめる予定だ。*豊浦小学校提供資料をそのまま掲載

中学校での実践

英語教育と地域学習を 連動させた小中一貫教育で 学力と郷土愛を育む

那須塩原市立塩原小中学校

◎ 2014 (平成 26) 年、栃木県初の施設一体型小中一貫校として開校。開湯 1200 年の塩原温泉郷の中心に位置し、恵まれた地域文化や自然を生かした教育活動を進めている。

校長 高久昭彦先生

児童・生徒数 120 人 (小学生 76 人、中学生 44 人)

学級数 12 学級 (うち特別支援学級 3)

住所 〒 329-2924 栃木県那須塩原市中塩原 364

電話 0287-32-2919

URL 正式なホームページを 2016 年度開設予定



9年間一貫の良さを生かした 特色ある教育活動を展開

那須塩原市立塩原小学校と同塩原中学校は、市の小中連携推進事業の指定を受け、2010年度から両校の児童生徒や教員間の交流を図り、2012年度からは小中一貫の教育課程と学校システムの研究を行ってきた。

そして、2014年度に小・中の学校施設を一体化し、那須塩原市立塩原小中学校として本格的な小中一貫教育をスタートさせた。そこには、地域の子どもの数が減り、学校の統廃合が進む中で、小中一貫にして9年間一貫の特色ある教育を充実させることで、市が掲げる「人づくり教育」を実践しやすくするねらいがある。

指導区分は4-3-2制(図4)だ。5年生以上は主要教科を中心に教科担任制とし、小・中の乗り入れ授業も実施。授業時間も、5・6年生は中学校と同じ50分授業を基本とした。

小中一貫校化に当たり「人づくり教育」の柱に据えたのは、コミュニケーション能力の育成を図る「英語教育」と、塩原を愛する心を育む「地域学習」だ。これらを連動させ、到達目標として9年生の修学旅行先で自作の英語版塩原観光リーフレットを配布する活動を行っているのが、同校が行う教育活動の最大の特徴である。

高久昭彦校長は次のように説明する。

「本校では少人数制の強みとして、子どもと教員のコミュニケーションを密に行っていますが、それが子どもの自主性や表現力の弱さにつながっている側面があります。そこで、英語教育と地域学習を2本柱に据えて、地域を知り、物怖じせず、自信と誇りをもって英

語で情報発信が出来る子どもの育成を目標にしました」

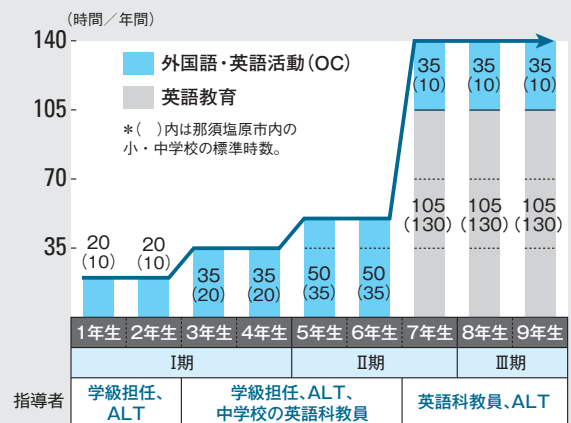
小学校での英語活動を継続し 9年間一貫のOCを展開

既に1年生から行っていた英語教育では、教育課程特例校制度を活用し、学校独自に授業時数を増加。更に、7～9年生では、週4時間のうち1時間をオールコミュニケーション(以下、OC)とし、9年間一貫したカリキュラムとした(図4)。

更に、9年間一貫したCAN-DOリストを、2013年度に1年間掛けて検討・作成した。市の英語教育推進委員会の渡邊寛治委員長からアドバイスを受けながら、同校の英語科教員と市教委の指導主事が連携して構築。ここで作成した学習到達目標の下、市が作成した英語活動のカリキュラムに基づいた授業を進めている。

授業は、常駐のALTと学級担任または教科担任のチーム・ティーチングで、3～6年生では中学校教員も加わる3人体制だ。OCはALTを中心にオールイングリッシュで進められ、それを継続して、中学生の通常の英語授業もオールイングリッシュを基本とする。8年生の英語を担当する茂田井金子教頭はこう語る。

図4 英語教育の9年間の流れ



*塩原小中学校提供資料を基に編集部で作成

「昨年度、本校に赴任した時、OCのカリキュラムやオールイングリッシュでも問題なく授業が進められていることに衝撃を受けました。私自身、子どもとコミュニケーションを取りながら進める授業はとても楽しく、子どもたちと共に授業をつくっているという感覚です」

高久校長も、高校入試対策の面で、OCに時間を割り当てることに不安を感じていた。しかし、2014年度に、週3時間分の授業で、文法事項など学習指導要領の内容をきちんと終えられたこと、また、9年生の大半が英検3級を取得し、英語の試験の得点も9年生になってから飛躍的に伸びたことから、指導法に間違いがないことを確信したと話す。

学んだ英語は、「グローバルコミュニケーションデー」（2015年度は2回実施）や「イングリッシュデイキャンプ」などのアウトプットする機会も用意。8月に実施したキャンプには、5年生以上の29人と市内のALT 10人が参加し、バーベキューを楽しむ一方で、ALTと一緒にミニ英語劇を台本作りから発表まで行った。

英語版観光案内を作成し 修学旅行先で外国人に配る

地域学習は、1・2年生の生活科、3年生以上の「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）で行う。「大

好き塩原」をテーマに、9年間一貫したカリキュラムを作成（図5）。1年生から体験活動を通して地域を学び、5～8年生では、塩原の観光案内人である「ジュニア観光マイスター」の取得を目指して、地域の外部講師による講座を30時間受講する。

そのように、1年生から積み上げてきた英語学習と地域学習の集大成が、英語版塩原観光リーフレットの作成と配布だ。まず、7年生で日本語版塩原観光リーフレットを作成し、東京で行われる塩原温泉の観光PRイベントで、生徒が自ら来場者に配布。8年生では、日本語版での経験を基に、1グループ3～4人で英語版のリーフレットを作成する。

「これは総合学習での活動なので、担任が指導し、英作文に関しては生徒が自主的にALTや英語科教員に質問したり、添削をお願いしたりしています。思考力や表現力なども問われ、まさに教科横断型のプロジェクト学習となっています」（茂田井教頭）

そして、9年生の4月に実施する京都・奈良への修学旅行で、1人最低5部のリーフレットを持ち、自ら外国人に話し掛けて手渡す。

「事前に初対面の外国人と話す練習をしてはいますが、物怖じせずに外国人に話し掛ける生徒の積極性には驚かされます。普段の学習で自信が付いているからでしょう。手渡した

外国人からお礼の手紙をいただくこともあり、生徒にとって有意義な活動だと実感しています」（高久校長）

小・中連続した授業づくりで 学習効果を高める

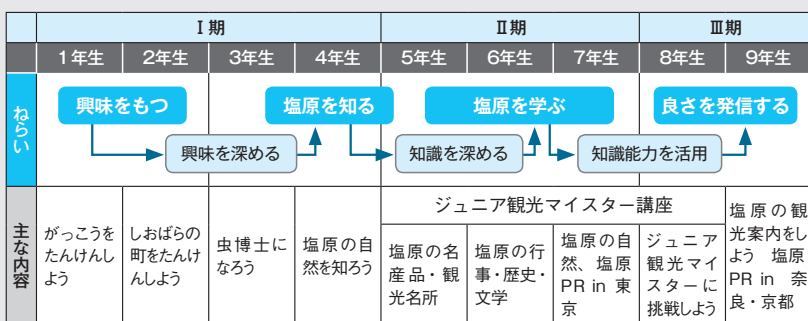
小中学校としての1年目を終えたところで、既に成果が表れている。アンケート結果では、9年生でも「英語の授業が好き」の肯定率が75%、「塩原の良さについて英語で伝えることが出来る」の肯定率が100%、「一番苦手な活動」として「話すこと」を挙げた生徒はなんと0%だった。

「中学校では小学校までの英語活動を踏まえた授業づくりをしており、その連続性が子どもの学習意欲を高めているようです。また、中学校の英語科教員が3～6年生の英語活動に参加しているのを生かし、小学生でも中学校での到達目標を意識した指導を行っています」（茂田井教頭）

ALTが常駐しているため、教員と常に連携しながら授業を進められていることも成功の要因だという。

「子どもの減少が止まらないのが悩みですが、子どもの郷土愛は着実に強まり、地域の祭りには大半の子どもが参加します。今後も地域との連携を深めながら、この教育を推進していきたいと思います」（高久校長）

図5 地域学習「大好き塩原」の構想図



*塩原小中学校提供資料を基に編集部で作成



那須塩原市立
塩原小中学校
校長

高久昭彦

たかく・あきひこ

「自然や人々に恵まれた塩原で、子どもが自信をもって生活できるよう支えたい」



那須塩原市立
塩原小中学校
教頭

茂田井令子

もたい・れいこ

「子どもたちのもつ郷土愛を、自ら表現している力を育みたい」